
俺とテストと遊戯王

スターダスト19

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とテストと遊戯王

【Nコード】

N2100BA

【作者名】

スターダスト19

【あらすじ】

ここは文月学園。

高等学校で、最新設備を誇る学習施設である。

そんな学校に通っている生徒たちの、ギャグストーリー。

「あ、あのお・・・」

目の前には青い髪の毛の少女がいた。

これがすべての始まりだった。

普通じゃない学校でおこる、あり得ないストーリー。

遊戯王と、遊戯王の霊使いさんたちにもとっぴょっぴょしてもらいます。

第0章 プロローグ（前書き）

読者のみなさん初めまして。スターダスト19です。

初心者なので、抜け落ち等あれば、ご了承ください。ごめんなさい。

・

まず、バカとテストと召喚獣の舞台をお借りしています。そのため、小説やアニメで出てくるワンシーンも使わせていただくことがあります。（キャラはちよつと触れるくらいです）

次に、遊戯王ですが、霊使いの方に協力していただいています。あと、オリジナルカードもたびたび登場させます。

あと、プロローグは物語設定の参考程度に考えて下さい。

その点を踏まえてお楽しみいただければ幸いです。

では、どうぞお楽しみください。

第0章 プロローグ

プロローグ

LP8000 vs LP 0
「いくぞつ。スターダストドラゴンで攻撃！」

ふう、やれやれ。毎日これの繰り返し。異常に疲れた・・・
「流石だな、久斗。ま、先生に勝ったことで浮かれちゃだめだぞ。」
と、いまさつきまでデュエルをしていた坂本先生が言う。

「大丈夫ですよ。俺はバカだけど、そこまで調子のりませんから。」
「ならいいがな。」

・・・まったく、この先生もこの先生だ。生徒相手に1Pも削れなかつたんだから。

「やつぱつええな、お前。」
俺の悪友、吉見 陸だ。口ではそう言ってるけど、コイツもつよい。確か、ヴァイロンだったかな。

「いやいや、おまえだって、余裕で倒せるだろうが。」
これがいつもの俺の毎日。放課後、授業が終わってから誰かの相手をしている。

「祥平さんよお、素直に喜ばないじゃんか。」
また俺の悪友、荻野 隼人、だ。こいつのデツキは、忍者だったはず。

「確かに強かった」
コイツも俺の悪友、山下 祐輝だ。こいつはエグイ。なんだよラビツトラギアって。

良くわかんないけど、なんでか俺含むこの4人が強いつてハナシだ。別に俺は強くなんかないんだけどなあ。 ともかく、この4人でいつも腕を磨き合ってる。

・・・まあ、強いつて言われるのは嫌じゃないけどね。

俺以外のこの三人も大変だろうなあ。俺もだけど、下手したら1につに十何人も相手しないといけないからね。ちなみに今日は一番相手が多かったのは俺だ。

疲れた。眠い。帰って寝よう・・・

「なあ、祥平、帰りにゲーセンでも寄ってこうぜ。」

「あ、それええなあ。」

・・・隼人、陸。君らは鬼か。

「まあいいけどさ、早く帰りたいからなるだけ早めに頼む。」

こんな俺の日常が思いつきり覆されるのは、いつもと変わらない日だった。

ゲーセンからの帰り道、突然声をかけられた。

「あ、あのう・・・」

それがすべての始まりだった。

第0章 プロローグ（後書き）

はじめて小説をかいて、緊張しまくったスターダスト19です。
読者の皆さま、読んでいただき本当にありがとうございます。

文章力は今からつくんでしょうか・・・

とりあえず、いまある小説ネタは今日中にのせてしまおうと思っ
ているので、そちらの方もよろしく願います。

登場人物紹介（前書き）

今回は登場人物をまとめておきます。

登場人物紹介

登場人物

久斗 祥平 (ひさと しょうへい) Fクラス

バカテスという吉井 明久みたいな役割の人物。
遊戯王が得意。

勉強については、Fクラスの中では上のほう。

得意科目は国語・理科ー(生物に限る)・遊戯王。

デッキはドラゴン族主体のシンクロデッキ。

エースカード スターダスト・ドラゴン(シンクロ)

葵 エリア (あおい エリア) Fクラス

ひよんな事から久斗家に住むことになった青い髪の少女。

遊戯王、勉強ともに良くできる。本人の希望でFクラス入りとなつた。

勉強については、努力で伸びるタイプで、ほぼ学年1位の实力を持っている。

若干抜け目の所もある。

得意科目は数学・国語で、苦手科目は英語ー(それでも300点以上取っている)。

デッキは水属性メインのシンクロデッキ。

エースカード 氷結界の龍 グングニール(シンクロ)

雅 ウィン (みやび ウィン) Fクラス

エリアをおつてきて久斗家に住んでいる緑の髪の少女。
遊戯王のプレイングタクティクスは抜群。

勉強は普通。本人の希望でFクラス入り。
マイペースな性格。

得意科目は理科。一（500点前後）。苦手科目が国語。一（20
点未満）他の科目は60点前後。

デッキはドラグニティ。

エースカード　ドラグニティナイトーゲイボルグ（シンクロ）

荻野　隼人　（おぎの　はやと）　Fクラス

バカテスでいう坂本　雄二みたいな役割の人物。

遊戯王が得意。常日頃から久斗と悪だくみ一（？）を企てている。
勉強については、一応Fクラス代表レベルだが、他と大して変わら
ない。

得意科目は社会一（日本史以外）・体育・遊戯王。
デッキは忍者関連のカードを良く使う。

エースカード　機甲忍者ブレード・ハート（エクシーズ）

夜神　ダルク　（やがみ　ダルク）　Fクラス

バカテスで言う木下　秀吉見たいな役割の人物。

外見から、色々なひとに女の子扱いされているが、戸籍上はれっき
とした男。

荻野いわく『ダルクはダルクっていう性別』らしい。
勉強はあまり得意ではないらしい。得意科目は体育。

デッキは悪魔。

エースカード 幻魔皇 ラビエル（効果モンスター）

有乃 高志（ありの たかし） Fクラス

バカテスで言う土屋 康太みたいな役割の人物。

『寡黙なる性識者』で、ムツツリーニと呼ばれる。

保健体育の成績は、ずば抜けていて彼の総合科目の90パーセントは保健体育である。

遊戯王はロック系のデッキを使っている。

エースカード ダークシムルグ（効果モンスター）

椿 美紀（つばき みき） Aクラス

バカテスでいう霧島 翔子みたいな役割の人物。

隼人と事実上つきあっている。

勉強については、最高レベルで、学年1位の学年主席。――（体育以外の科目は400点越。）

遊戯王についても強く、なんとか公認大会で優勝している。デッキは不明。

衛藤 光一（衛藤 光） Fクラス

バカテスでいう須川 亮みたいな役割の人物。

FクラスでFFF団という異端審問会（人の不幸は喜ぶども、人の幸せはほっておかないがモットー）のリーダーをやっている。

勉強、遊戯王ともに興味を示さず、人の幸せをつぶしていくため日々努力している。

吉見 陸（よしみ りく） Cクラス

久斗・荻野・山下とは中学校のころからの知り合いで、悪友。遊戯王が得意。

勉強については、Cクラストップレベル。得意科目は数学・社会・遊戯王。デッキはヴァイロン。

エースカード ヴァイロン・アルファ（シンクロ）

山下 祐輝 （やました ゆうき） Aクラス

久斗・荻野・吉見とは中学校のころからの知り合いで、悪友。遊戯王に限らず、ほとんどの科目において優秀な成績を上げている。勉強はオールマイティで、すべての科目ができるが、本人いわく苦手なのは国語。

学年2位の地位を築き上げている。デッキはラビットラギア。

エースカード エヴォルカイザー・ラギア（エクシース）

藤堂 カヲル （とうどう カヲル） 学園長

この物語の舞台、文月学園の学園長。

召喚システムを作った張本人であり、久斗・荻野からは、『クソババア』や、『ババア長』と呼ばれている。事あるごとに登場人物を巻き込む老婆。

西村 宗一 （にしむら そういち） 補習教師

この学校の鬼の補習教師。

このことから生徒たちには、『鉄人』と呼ばれている。
趣味はトライアスロン、冬でも半そでという筋肉バカの教師。
ただ、生徒には真っ向から向かっていく性格で、ときたま優しい性
格にもなる。

登場人物紹介（後書き）

・・・霊使いさんの名前、皆さん気がつきましたか？
霊術カードにでていたやつです。

たとえば、エリアさんだったら『水霊術ー葵』だとか。
でも、ですねえ・・・

闇と・・・光が・・・ないんですよっつっ！

流石に『欲』ってのは名字には出来んっ・・・！

せっかくダルク君を秀吉扱いしようと思ってたのにつ・・・！
だから、勝手に名字つけました。

デスノートの主人公の名字だった気がします・・・夜神って・・・
あと、ムツリニキヤラはどーしても必要だったので。
では、本編をお楽しみください。

（新しい重要人物が出てくるたび、このページは更新します）

第1問 俺とエリアとすべての始まり(前書き)

今回は物語の設定ということで、あんまりギャグはいれてませんが、よろしく願います。

第1問 俺とエリアとすべての始まり

俺は久斗^{ひなた} 祥平^{しょうへい}。

文月学園の高校2年生。この学校の特色は、授業にデュエルがあること。（遊戯王に限る）

それと、1年の終わりに行われる振り分け試験というもので、阿多物イイ奴はAクラス、下はFクラスという成績累進式の教室設備がある。Aクラスは個人エアコンやリクライニングシート、冷暖房完備のうえ、個人パソコンまであるのに対し、Fクラスは畳にちゃぶ台。なんていう差別だろうか。

この状態を改善するには、試験の点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を使用した戦争「試召戦争」で勝ち上がり、上位クラスの設備を奪い取るしかない。また、遊戯王のモンスターを召喚獣の代わりに召喚できる。FクラスはLV3まで、EクラスはLV4まで、DクラスはLV6まで、CクラスはLV8まで、BクラスはLV10まで、Aクラスはすべてのレベルのモンスターを召喚できる。（テストの点数によって変化もある。）

これだと圧倒的にAクラスが有利だが、戦争するとき、下位クラスには『団結』する権利が与えられる。『団結』というのは、複数の生徒で1体のモンスターを呼び出すことだ。遊戯王のモンスターに限られるが、団結を使えば下位クラスでも上位クラスと互角の戦いができるというわけだ。

そして、まだ厳しい取り決めがある。

下位クラスが上位クラスに負けたとき、設備ランクが1つおとされ、逆に上位クラスが下位ランクに負けたとき、クラス設備を交換できる。また、戦死者（召喚したモンスターが破壊された者）は、その戦争終結まで補習を受ける義務を負う。そして、一度負けたクラスはその学期の間宣戦布告できない。

これは、試召戦争が泥沼化しないための取り決めだ。

さて、面倒な説明はともかく、コイツをどうやって大人しくさせるか、が問題だな。うん。

「なにいいいいいい」 変態バカの衛藤 光。人の幸せを恨む
異端審問会の会長だ。

「事情を聞いてほっとけなかったんだ。」

昨日のこと。

ゲーセンの帰り道、不意に声をかけられた。

「あ、あのお、カード、おとしましたよ？」 といって俺がおとしたらしいカードをさし出してくる青い髪の毛の少女。

「ああ、ありがとう。」 受け取ってみると、『スターダスト・ギャラクシー・ドラゴン』だった。
危ない危ない。

「珍しいカードですね。見たことないです。」

そうだろうね。多分持つてる人なんてそういないんじゃないのかな。

「うん、俺のお気に入りだよ。というか、君、大荷物だけど、いったい何が」

しまったああああ！あんまり知らない人と関わりたくなかったのに、つい口が勝手に……っ！

「え？えっと、これは……その、あれですっ」 力強く断言された。
あれってなんだよ……

……まあ、この子に何かあるのは明確かな。
「なんか荷物重たそうだし、うちで休憩でもしていく？すぐそくだし」

「いいんですか？」 「別に俺は構わないよ。」 「じゃあ、お邪魔します。」

「なるほど、事情は大体わかった。」

ところ変わって俺の家。ちなみに俺は自由気ままな一人暮らしだ。

親父の仕事の関係で、両親は海外にいる。んで、この子の名前が『葵 エリア』というそうだ。エリアって呼んでくださいって言うってたけど、流石にファーストネームはキツイ。ともかく、この子は親がいないらしく、この年まで施設に預けられて育ってきたらしい。

んで、その施設がいつぱいいつぱいになり、最年長だったエリアが施設を出てきた、というわけ。……となると……

「なあ、そんじゃエリアさんは生活する場所あるの？」

「えっと、ない、ですね」

そんなきつぱり言わなくてもいいじゃないか。

……なんか、可哀そうだな。

「もし、よければ、ここに置いてほしいです。」

なんてことを言い出すんだ。この子は。

でも、絶対にいや、というとウソになる。どうするかなあ。親に電話つながらないしなあ……

「……」「……」「しばし沈黙。」

「……すみません、変なことを言っちゃって。忘れて下さい。」

俺は今、とても重要な、人生のターニングポイントにいる気がする。

「うーん、まあ、このままにして置いてなんかあったらいやだからね。いいよ。うちにいて。」

「ほんとにいいんですか?！」

……俺って信用ないのかな……

「うん、エリアさんさえよければ、俺は別にいいよ。」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

「あと、敬語じゃなくていいよ。」

「あ、はい、判りました。」

「・・・思いつきり敬語じゃないか。」
「まあ、学校の事もイロイロ決めないといけないよね。」

「と、いうわけ。」

「A班は家庭科室に包丁を取りに行け。B班以降はカッターでもハサミでもいいから、出してこい。」 衛藤もバカだなあ。皆がそんなことする訳。「「イエッサー」「」な、なにつ！」

「落ち着けお前ら！俺はただ。」

【黙れ、邪教徒。誰もが踏み入れることの許されない領域を汚す悪人め。】
うん。

「・・・君らのほうが悪人だ。」

「まあ、そういうわけだよ。」

「よろしくおねがいます。」俺の横で小さくなって挨拶をしているエリア。なんか妙にかわいい気がする・・・

【「【よろしくおねがいます〜】】】

衛藤を代表として、挨拶の合唱。うん、吐き気がする。

「ね、ねえ、祥くん、この人たち、大丈夫なの？」

恐らく大丈夫じゃないだろう。

「・・・祥くん、といわれて、考え事に【あのバカ、また意識が飛んでるぞ】入る俺。」

「えっと、なんてよんだらいい、かな？」

「『エリア』って俺は呼ぶけど、それがいいんだろ？」

コーラを飲みながら答える。

「うん。じゃあじゃあ、私は『祥くん』って呼ぶね。」

そして、コーラを吹きだしそうになる。

「えらいまあ略したもんだね・・・別に気にしないけど。」

【チヨキの正しい使い方を教えてやる。】隼人の声。
ぶすっ。 あ、嫌な音。

(こ、声が出ないほど痛い・・・)

隼人のチヨキが、俺の眼球にフレンチキスをプレゼントしていった。

(詩的表現)

「あ、だ、大丈夫？」

エリアの優しさが心にしみわたる。(あと目に涙と激痛も)

【さあ、邪教徒、こちらをむけ】

声が出た方に顔を向ける。(目が見えないからね。)

【そっちじゃない、こっちだ】

視界を奪われてどうしようと。

【お前は自分の罪を悔いあらため、罰を受けるか。】

「ちよっ・・・罰つてなに?! 理不尽な。」

【特別バンジーの刑に処す。ひもなしの】

それは絶対に避けたい。

【さあ。どうする。】

「どっちにしても、俺の死亡フラグに変わりはないじゃないかっ・・・」

「」

【ふん、気がついたか。バカだから、気がつかないと思っていたんだがな・・・】

いや。気がつかなかったら重症だ。

「っ、つかれた・・・」

俺の家のリビング。家に帰ってソファーにダイビングした。

「イロイロお疲れ、祥くん。」

エリアの気使い。めちゃくちゃ優しい・・・

・・・エリアといると、異端審問会に殺されそうだけど、気が楽に

なる。不思議だ。

「まあ、明日からも頑張ろうかな」
無意識に声に出してる俺がいた。

第1問 俺とエリアとすべての始まり（後書き）

どうも。スターダスト19です。

読んでいただきありがとうございます。感謝感謝です。

今回はあまりギャグっぽいところがなかったですね。

次回は、おもしろくできたらいいなあ・・・

突然の次回予告！

バカテスファンならだれでも知ってる、あの人達も登場させます！

（明久たちじゃないですよ?!）

では、次回予告っ。『第2問 俺と子供と召喚システム』

次回、お会いしましょう！

第2問 俺と子供と召喚システム【1】（前書き）

今回はなんと、子供の話？

そして、久斗家にまた訪問者がっ！

「・・・もう、すきにしてくれ・・・」by 学校を代表するバカ

「・・・終わった。俺の人生終わった・・・」by 学校を代表する
カス

第2問 俺と子供と召喚システム【1】

エリアが俺の家に来てから1カ月がたった。

あいつは相変わらず男女問わず大人気で、俺は相変わらず命の危険と隣り合わせの状態だった。

と、いうかエリアが俺の家に来てから俺の負担がすごく減った。

「泊めてもらってるんだから、これぐらいはしないと、ね。」

と、いって、家事全般をやってくれている。嫌な顔一つせず。

そして、判ったことがある。人って、自分の好きなことをやってるときは、すごいいい顔をしている。

それは、べつに顔が綺麗とかイケメン、とかそういう話じゃなくて、もつと、こう、なんていうか、奥が深い感じだ。たとえば、俺はエリアとよくデュエルしているけど、そのときのエリアの顔はなんか言葉で言い表せない魅力で一杯だ。勝つても負けても、「あく楽しんで」みたいな顔。勝つてないからデュエルを楽しんでる。そんな感じだ。エリアは心の底からデュエルを楽しんでいる。

・・・自分はどうなんだろう。デュエルがすきだから、色んな人としてぶつきたいってというのが俺の本心なのに、めんどくさいとか何とかいって距離を置こうとしてないだろうか。うーん。

「・・・ん・・・くん、おーい。」

「っ！え、あ、なに？」またぼーっとしていたみたいだ。

「大丈夫？」

「ああ、うん大丈夫。気にしないでいいからさ。」ホントに大丈夫なのか俺。

「あ、ひよつとして、ご飯、おいしくなかった・・・？」

「いやいやいやいや、そんなことないよ。めっちゃうまい。」

即座に否定する俺。これは本心だ。

・・・というか、エリアって家庭的で人当たりもいいんだよなあ。

「そう？ならよかった。作りがいがあるよ！」笑顔でしゃべってく

る。

なんか・・・おちつくなあ。うん

「・・・っ！」危ない危ない。またトリップするところだった。今度は考え事じゃなく、みとれて。

『ピンポーン』

インターホンが鳴った。ナイスタイミングだぞ、インターホンもとい訪問者っ！

『・・・エリアさん、いますか？』

うらむぞ、インターホンもとい訪問者。というか、誰だろうこんな時間に。声からして、女の人？

「は〜い」玄関に向かうエリア。一応俺も付いていくことにする。なにかあつたらいやだからね。

「・・・こんばんわ」やっぱり女の人・・・というか少女、だ。エリアの友達・・・？あつあれはっ！

「隼人じゃないかあ。椿^{つばき}さんと、デートしてたの？（ニヤニヤ）」俺が隼人を茶かす。

なんと、一緒に隼人も来ていた。

「たのむ、祥平。その話はリアルにやめてくれ・・・」しおれた隼人。

「やつほー、久斗クン。」めっちゃ元気な椿さん。

今日の昼のこと・・・

「あれ？隼人、なにやってんの？しかも、よこにいるのは、確か学年代表の・・・」

「うぐっ！な、なんでおまいが・・・っ。」

隼人SIDE

ちくしょう・・・こんなタイミングでまさか出くわすとは思ってなかったっ！

誤解されちゃうんじゃないか？この展開！この状況！まずいまずい
何とか言わないと・・・

「ん、はじめまして。椿っていいます。よろしくね。隼ちゃんの
カノジョなんだ」

なんてことを~~~~っ！

祥平SIDE

あれ、なんでコイツが？まさかっ！

「ん、はじめまして。椿っていいます。よろしくね。隼ちゃんの
カノジョなんだ」

・・・・・・。ほほう。

「隼人。なるほどねえ（ニヤニヤ）」

「やめてくれ、そんな目で俺を見るなあ！」

「大丈夫だよ、隼人。俺たちは仲間じゃないか。」なんでコイツは
こんなに取り乱しているんだろう。

「そ、そうだよな、俺たちは仲間だよな！だから・・・」

・・・ようじんぶかいなあ、隼人は。

「絶対にクラスの異端審問の会に（ばらすからさ！）（ばらさな
いよな！）」

最後の単語だけ、隼人と意見がずれた気がするけど、まあそんなこ
と気にしなあい。

・・・お前も俺と同じ苦しみを味わえっ！

「そっぴや、俺、衛藤に用があるんだった。じゃあねえ」

「・・・・・・（土下座）」

「ねえ、隼人。邪魔だから、そこどいてくれないかなあ」

「頼みがある！」

「やだなあ隼人。そんな恰好で頼みなんて。」

「このことは誰にも言わないでほしい！」

「わかった。言いはしないよ。」

「まじか！・・・でも、なんでお前の手がさつきからケータイで文字を打ってたんだ？」

「ああ、エリアに連絡してるんだよ」嘘だけど。

「じゃあ、内容確認していいよな。」

「ピッ・・・うん、いいよ。」

『T O 衛藤 光

異端者発見。午後2時37分、ショッピングモールにて荻野隼人が学年代表の椿さんと一緒に仲良くお買い物しながら手をつないでいた。だが、今取り押さえるのではなく、後日、学校で会にかけるのが得策だと思う。』

「・・・なっ？」

「・・・終わった。俺の人生終わった・・・」

「なんて、ジョークだ。まだ送信してない。」・・・嘘だけど。

「マジか?! 恩にきる!」

と、いうことがあった。

そんなことを隼人とやり取りしていると、

「ウインちゃんじゃない! どーしたの?」

「・・・私も、出てきた。今日、偶然エリアちゃんをみたから・・・」

「

「行くあてがないんだったらさ、今日から一緒に暮らそっか!」

「・・・いいの?」「当然!」

・・・あれ? なんか俺の知らないところで話が進んで行っている気がする。

「ターーーーイム!」

「どうしたの祥くん。」

「いや、どうしたもこうしたもないからさー!」

「・・・今日からよろしくお願いします。」といて頭を下げる・・・
たしか、ウイン、だっけ？
「いやいや、どこをどーすればこんな話になるの？」

事情聴きとり中

「なるほど、大体わかった。」

あのあと、隼人は椿さんと帰り、俺の家のリビングに俺がエリアとウインが向かい合って。座っている。・・・この子の名前が『みやび雅ウイン』。どうやら隼人達にエリアが住んでるところを教えてもらっていたらしい。そうじゃないと、判んないよね。ふっつ。

「だから、この子も今日からこの家で暮らすことになったの！」あれ？決定済み？

「タイム。決定権は俺がもっているは？」

「・・・お願いします。」

俺の言葉が遮られた。

「うん、だからだ。」

「ほら、ウインちゃん、だから言ったでしょ？」うん『っっていうてくれるって！』

「あの、さっきのはそういう意味では？」

「・・・ありがとうございます。」

合計3回も俺の発言権が奪われた。

「ね、いいよね、祥くん！」

「・・・もう、すきにしてくれ・・・」

・・・いまさら、なにを、いえようか・・・

【この邪教徒、どうしまつするか・・・】

翌日、学校に着いた俺を待っていたのは縄で縛られて畳に転がされ

ている隼人と、異端審問会だった。

・・・あの野郎、また何か言いやがって・・・

「強烈な仕置きだった・・・」

隼人がほざく。ふん、その程度、ミツバチのハチミツよりもあまいわっ！

「俺、お前らとクラスが別でよかったわ」陸。

「同意」山下。

言い忘れてたけど、俺と隼人がFクラス、陸がCクラス、山下がAクラスだ。

それで思い出したけど・・・

「なあ、隼人。学園長に、教室設備の相談しない？Fクラスとはいえ、このままだとカゼひくだろう？」

「掛け合っても無駄だとおもうけどな。設備がほしいんなら、試召戦争に勝つてやつた。」

「けど、さすがにこれだと勉強に支障をきたしたりするんじゃない？」

「ま、そーなると本末転倒だよな。」

「だめもとで、かけあってみない？せめて、割れてる窓の交換とかは普通はしてもらえないはずだよ」

「そーだな。いっちょよいってみつか。」隼人にしては珍しく話がわかるじゃないか。

「お前ら・・・さつきまで敵対してたんだろう？」陸が言う。

「昨日の敵は今日の友ってことは、しってる？」

陸に問い直すように言う俺。すると、

「お前らは敵と仲間に入れ替わりが激しすぎるんだよ・・・」なんだいその呆れ顔は。・・・あえて否定もしないが。

俺の割合で言うと、敵対7、仲間感3つとこだ。そんなこんなで、俺と隼人は学園長室に向かった。

「このクソババアアアアアアアアアア!!」
ところ変わって学園長室。

「まったく、うるさいガキどもだねえ。」

といって顔をしかめる藤堂カヲル（クソババア）。このババアが学園長だ。

「うるさいぞ、しずかにしろ、荻野、久斗!」

といって檄を飛ばしてくる鉄人。・・・本名は、西村 宗一（鉄人）だったハズ。

そんなことより・・・

「かわいい生徒の頼みを、断るなんてアンタ本当に学園長か!」

こんな具合に。

「学園長、西村先生、お願いがあります「却下だ」。僕たちFクラ

「不許可だ」スの教「無理な話だ」室の設備「あきらめる」を少し

「駄目だ」でいいです「拒否する」から向上「無理を言っな」して

ほしい「嫌だ」
って断りすぎじゃないですか?!

回のお願いに8回も断られたのは初めてですよ畜生!

みたいな。

「僕は鉄人みたいに筋肉バカじゃないし、ババアみたいにおいぼれてないから仕方ないじゃないですか!」俺が言う。

「そうですね。2年を代表するバカの言うとおりです」と、隼人が言う。・・・ちよつとまった!っ!

俺もそこまでバカじゃない。

「そうですね。2年を代表するカスの言う通りです!」と、俺が言う。
ふん、ざまあ見やがれ!

「何言つてんだ祥平。お前は学校を代表するバカじゃないかっ！」
「いやいやいや隼人。きみは学校を代表するカスじゃないかっ！」

「……………！！（胸倉のつかみ合い）」

「ないな。祥平、お前こそ地球を飛び出して宇宙レベルのバカだな。」

「黙れ隼人。きみは学校どころか世界に通用するレベルのカスだよ。」

「……………！！（ガンのくれあい）」

「お前ら、さっきまで共同戦線はってたのに……………陸が言う。」

「すぐにくずれた。」山下が言う。

「……………！！（メンチのきりあい）」

「……………とりあえず、教師の呼び方から変える。」

「なんだ。そんなことか。隼人も気がついたようだ。」

「よろしく宗くん 【パキユッ】」

「まかせた宗一 【ポキユッ】」

「教師をファーストネームで呼ぶな。」

「「大事な右手がああああ！！」」

「万力のような握力で俺と隼人の手の骨が粉碎された。
くそっ。それならなんて言えばいいんだっ！」

「……………なんか、この光景を見てると3年前のガキどもをおもいだすねえ。」

「学園長。あいつらは、これよりもっとためでしたから。特に吉井と坂本は。」

「そうさね。あいつらはほんつとバカだったからねえ。」

「・・・なんか、俺たちそつちのけで昔話に盛り上がってるな・・・
畜生っ

「センサー、あいつらの言い分も一理あると思います。」 ナイス助
け舟だ陸っ！

「同意」いいぞ山下っ！

「だが、これは学校の取り決めだからなあ・・・」
よし、鉄人が甘くなってる！もうひと押しだっ！

「頼むせてっちゃん 【パキユツ】」

「頼んだてっつん 【ポキユツ】」

「2回も同じことを言わせるな」

「無事だった左手がああああああ」

チクショー、これじゃあ手が使えないっ！

「・・・まあ、こつちの頼みも聞くなら、きいてやってもいいけど
ねえ」

「お断りします」

隼人と声がそろった。

「・・・つれないねえ」

「・・・一応、内容は聞こうか。」

「・・・まあいいさね。・・・召喚システムのことなんだけどね・・・

」

【2】に続く

第2問 俺と子供と召喚システム【1】（後書き）

登場させるキャラ、学園長と鉄人（西村先生）でした。

・・・ちなみに、この物語、明久と雄二がいたところから3年が経過してるんですよ。それなのに鉄人は鉄人、ババアはババアでのこってるなんて・・・

次回予告！『俺と子供と召喚システム【2】』
お楽しみに！

第3問 俺と子供と召喚システム【2】（前書き）

ババア
学園長に教室設備の向上の交渉に行った隼人と祥平。

しかし、彼らはそこで両手の骨を鉄人に粉碎されて・・・？

「・・・召喚システムのこと、ちょっとね・・・」byババア

第3問 俺と子供と召喚システム【2】

「……まあいいさね。召喚システムのことであつとね……」

ババアが何か言ってる。うん。明らかに被害は大きいだろうな。

「んで、そのシステムの調整に俺たちに協力してほしい、と。」隼人が言う。

「頭の回転はまあまあじゃないか。クソジャリ。そういうことさね。」

うん。生徒をジャリ扱いた。……隼人の事だから許すけど。

「んでババア。仮に俺たちがそれをやったら、設備向上はしてもらえるのか？」当然の事を聞く隼人。

あたりまえじゃないか。そんな危険を冒すんだから、「いや。設備向上はしないさね」なにいいい！

「そんなあ！ひどいですよババア長！」つい口がすべった。

「その呼び方は今までで一番ひどいさね!？」

しまった。変な混じり方になってしまった。

「まあ、点数が低いあんたたちバカどもが協力してくれれば、こちらも何のリスクもなく実験できるわけさね。」

「……だつてさ、隼人。バカつて君のことなんだから、呼ばれてるよ?。」

「いやいや祥平、バカつてのはおまえのことだろ」

クラスにいたFクラスメンバーは俺・隼人・エリア・ウイン・高志・
ダルクの6人だ。

・・・椿さんは当然いたけど。

「点数が高いと何が起こるか分からないから、エリアは遠慮した方が
」
「いや、その必要はないさね。もし危なかったらアタシがフィール
ドを消すよ。」

なるほど。なら安心だ。

「なんか楽しそうなんかんだね」ダルクがいう。

「あ、ダルク、お前はやめとけよ。こういうのはあんま女子は関わ
らない方がいい」と、隼人が言う。

「またそんなこというの!? 僕は男だよ!」

「・・・(カシヤカシヤカシヤカシヤ!)」高志、もといムツツリ
ーニがシャッターを切っている。

「ムツツリーニ、カメラのシャッター、すり減るよ・・・?」俺が
言ってる。

「・・・!おれは、なにもっ・・・!」

「何を撮影してたの?」

「・・・知る必要はないっ!」

「いやいや、ムツツリーニの性格は知ってるから。」

「・・・何の事だかさっぱり分からない・・・!」

「ともかく、このメンツで実験させてもらうからね。」

「そっぴやババア長。俺たちがなにをすりゃいいんですか?」俺が
きく。

「しよ、祥くん！？一応この人、学園長なんだよ！？」エリアがいった。

「ああ、大丈夫。この人、学園長もといクソババアだから。」

「アンタねえ・・・誰に向かってそんな事いつてるんだい・・・」
ババアがいった。

「ババア長。」

「・・・よし。まずあんたから実験台にさせてもらおうとするかね。」

なんで！？俺なんかやつちやった！？

「そうさね・・・葵、アンタの手、借りるよ」

といってエリアの手を突然俺の手に当ててくる学園長ババア。なんだ？

「久斗、サモンって言ってみな。」

「はあ。サモン」

・・・なんか無理やりいわされた気がするけど。

すると、俺とエリアの間に、幾科学的模様が現れ、中からデフォルメされたキャラクターみたいのが出てきた。

「・・・ババア長。なんですかコレ？」

「あんたらの召喚獣さね」

ああ、召喚獣か。

・・・というか・・・さつきから・・・

「あ、あのさ、エリア。そろそろ手、離してもらっていいかな？なんかす、すごく緊張してるんだ」

「ふえっ！？あ、ご、ゴメン」

あわてて手を引っ込めるエリアに愛嬌を感じたり。
でもさ。

「なんていうか、エリアそっくりだね」

「いやいや、そんな照れることないよ隼人。(っっていうか照れても全然かわいくないし。)(こっちまでほほえんでしまっくらいに。)(ニヤニヤするくらい)」

こうなれば隼人の親バカは確定だろう。

「祥平!!お前だっっておんなじ状況だろうがっ!!」

・・・思い出しやがった、コイツ。

「・・・」エリアが帰ってきた。

「なんでそんなに赤くなってるの!?!これって占いみたいなもんだよ!?!」

「・・・あ、そ、そうだよ。恥ずかしがることないよね。あははっ」

ミエミエの作り笑い。

「っっていうか、この子ほとんどエリアじゃんか。」言ってみる俺。

「このとぼけた感じ、祥平そっくりだな。」隼人。

「なんか気が抜けてるもんね。久斗くんは」椿さん。

・・・そんな事実認めない。

「んじゃ、この子たちを一回消すよ」

「え、学園長、まだ私、この子としゃべってないんですけど・・・あっ!!」

俺とエリアの召喚獣は姿を消した。

「……………」

「…なんであからさまにおちこんでるんだ。」

「さて、次はだれにやらしてもらおうかねえ……………」

ババア
学園長が妙にノリノリだった。

第3問 俺と子供と召喚システム【2】（後書き）

俺と子供と召喚システム【3】に続きます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2100ba/>

俺とテストと遊戯王

2012年1月6日16時46分発行